

ぱちんこ依存問題に悩む方々に 的確な情報提供と他機関への橋渡しを行う。

ぱちんこ*が国民的な娯楽に成長するにつれ、愛好者の中には娯楽のレベルでは済まない段階に踏み込んでしまう人たちが現れ、数々の社会問題につながっています。こうした「ぱちんこ依存問題」の解決策の一つとして設けられたのが沖縄県にある非営利相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク」です。同機関は関連する団体と連携をとりながら、ぱちんこ依存に悩む人の復帰のための窓口として成果をあげ始めました。

実態すら把握されていない「ぱちんこ依存問題」より多くのデータを集める必要がある。

「リカバリーサポート・ネットワーク」にはさまざまな業務があるが、メインは無料で電話相談を受けるホットラインである。

電話をかけてくるのは、ぱちんこ依存に悩んでいる本人が過半数を超え、次いで家族・友人が多い。性別でいうと男性が7割を超える。月平均で60件ほどだが、新聞などで紹介された月は150件ほどにもなるという。

同機関のスーパーバイザーを務める安高真弓さんは、臨床心理技術者であり、精神保健福祉士でもあるが、現状について以下のように語る。

「今は全日遊連さんのご協力を得て、専用ポスターを各ホールに貼っていただいておりますが、まだ認知度が低い面がありまして、できればトイレに貼っていただければありがたいと思います。トイレは冷静になれる場所ですし、ポスターは小さいのでホール内では埋没しやすいですからね。新聞で紹介されると確かに相談件数は増え、家族からのものが多くなるのです。私たちとしてはやはりご本人にこの機関の存在を知っていただいて、電話していただきたいと考えています」

ポスターはそのまま貼るといたずらされやすいので、パウチなどにはさんで掲示して欲しいということだった。

※同機関では法律上の正式表記である「ぱちんこ」を採用しているため、本章ではそれに倣います。

スタッフは電話を受けると、本人の状況を詳細に聞き、資料を作成していく。その後の対応は状況によって変わるのだが、その状況というのも多種多様だ。

「やめたいのにどうしてもやめられないという場合は、ギャンプラズ・アノニマス(GA)やワンダーポートなどの回復施設をご紹介します。また、ぱちんこ依存は二次的な問題で、他の問題を抱えているケースも多いんです。高齢者だったり知的障がいがあったりですね。ご家族の方がどこに相談していいかわからなくて、とりあえずうちにかけてくる。そういう場合は、相談機関などを紹介することもあります」

同機関で相談員のチーフを務める横山順一さんはそのように語る。

根本の依存症を解消しない限り、
借金を解決しても意味はない。

ホットラインのルームでは常時3名のスタッフが電話での対応を行う。複雑な対応が必要な場合は、スーパーバイザーが加わる場合もある。会話の音は外には漏れないし、電話対応中は第三者は一切中に入れない。個人情報への配慮は厳しく行われている。

中にはなかなか話を切り出さない人もいて、的確な状況をキャッチするにはノウハウが必要だ。

「アルコールや薬物依存に比べると、ぱちんこ依存はその実態さえも明らかになっていないんです。人数にしても、これまでは医療機関に相談したり弁護士に相談するような人がいて、その話から推定して出した数でしかありません。でも、うちにかかってくる電話は全国で初めてのデータになります。できる限り多くの方の電話相談を受けたいと思います。また自治体や関連施設との連携を深めて情報共有を図る必要があるでしょう」と同機関代表を務める医学博士の西村直之さんは語る。

■助成団体

リハビリサポート・ネットワーク

http://www.geocities.jp/rsnokinawa/

**パチンコは、
適度に楽しむ
遊びです。**

あなたの遊技は、
度をを超えて
いませんか？

パチンコがやめられない…
どこに相談していいかわからない…
ひとりで悩まずに、お電話ください。

ばちんこ依存問題相談機関

リハビリサポート・ネットワーク

リハビリサポート・ネットワークは、パチンコホールの全国団体である
全日遊連の支援により設立された非営利相談機関です。ばちんこ依存
問題からの回復を支援するため、電話で無料相談を行っています。

相談窓口 **050-3541-6420** (月～金(土日祝祭日除く)
午前10:00～午後4:00)

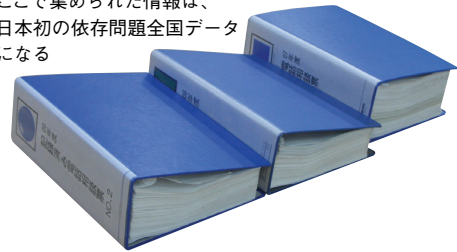
ホームページ <http://www.geocities.jp/rsnokinawa/>

ポスターを製作しホールに配布



2007年8月19日に開催された第一回「ばちんこ依存問題を考えるフォーラム」

ここで集められた情報は、
日本初の依存問題全国データ
になる



情報共有策の一つが、毎月発行される「さくら通信」である。これは全国の各関連機関や弁護士会、司法書士会などに配布される。また、同機関の活動を賛助する会員にも配布されている。

さらに、独自のフォーラムも開催する。これは相談者や家族だけではなく、全国の機関の相談窓口の方々を集めて情報を提供するものである。

「例えば弁護士事務所であれば、これまで借金を整理することを第一目的としていたと思うのですが、ばちんこ依存はそれだけでは解決しないんですね。ですので、そうした相談窓口の方に、まず根本的な問題について知って

いただき、対応していただくためにやっているのです」と西村さんは語る。

リハビリサポート・ネットワークの活動はまだ3年目を迎えたばかりだが、予想以上に多くのニーズがあることがこれまでの経過で明らかになっている。悩みを抱える人の相談窓口となり、少しでも多くの人々を救えるよう、AJOSCでも積極的にサポートしていきたい。

ばちんこ依存問題相談機関
リハビリサポート・ネットワーク
050-3541-6420
月～金曜日(土日祝祭日を除く) 10:00～16:00
相談無料

●担当者より 顧客サービスになることを訴えかけて、ホールへのポスター掲出を広めていきたいです。

ばちんこ依存問題相談機関 リハビリサポート・ネットワーク



組織統括責任者
西村直之さん



安高真弓さん



横川順一さん

相談を受けた方やご家族から時折「やめられましたよ!」という感謝の言葉をいただきます。私たちが良かったと思える一瞬です。ただ潜在的なニーズは相当にあるようです。私たちの活動をご案内いただくことは、ホールにとって顧客サービスにもなると考えています。今回、AJOSCさんの助成を受けてポスターも多く作成できましたので、ぜひ掲出していただいて、いつまでも明るく楽しいホールを作って欲しいと願っております。

リハビリサポート・ネットワークが「第一回ぱちんこ依存問題を考えるフォーラム」を開催。

リハビリサポート・ネットワークは、2007年8月19日に大田区産業福祉プラザにて、「第一回ぱちんこ依存問題を考えるフォーラム」を開催した。NPO法人 ワンダーポートとの共催で行われたこのフォーラムには、ホール関係者、医師、司法書士、回復施設関係者が集まり、シンポジウム、ディスカッション、講演などを通じて、日ごろ支援を行う上での問題点の共有が図られた。

シンポジウムでは、リハビリサポート・ネットワークの相談統括責任者（現スーパーバイザー）である安高真弓氏がコーディネートをを行った。最初のシンポジウムでは、九州地区遊技業組合連合会で青年部副会長や社会貢献委員会委員長を兼任されている力武一郎氏が、これまでのホール経営とお客さまとのやりとりを元に現状を語った。声かけは難しいが、以前のアンケートでは3割の方に依存傾向があったこと、ワンダーポートのポスターを貼ったら、年間2人の人が電話をしたことなど、実状を語った。仮に全国1万店舗に2名ずつとすれば、単純計算で年間2万人の方が救済の道を見つけることができる。リハビリサポート・ネットワークのポスター掲出を図り、問題点を全国の店舗がシェアしていくことが業界自体の活性化と社会への認知につながると結んだ。

永く依存問題とつきあっているワンダーポート理事長の稲村厚氏は、依存に陥る人のほとんどがごく普通の人であるにもかかわらず、最終的には多重債務に陥り、罪悪感を抱えながら誰にも言えずに苦しんでいる状況を語った。

また精神科医の伊波真理雄氏は「苦しんでいる本人たちを温かい目で見守るシステムは医療の中にはない」と語った。時には家族が本人を苦しめることもあるという。ましてや今の日本の医療にはまったく期待できない。現状では回復施設と家族の教育が救いの道だと氏は訴えた。

そして自分自身がキャンブル依存症になり、その経験を生かしてワンダーポートを開設した、現在同施設長の中村努氏がこれまでの考え方の変化を語った。依存を「病気」という言葉でとらえると、マイナス要因が大きいと考え、「問題」という言葉を使うようになったということ。



客席はほぼ満席で、注目度の高さをうかがわせた



ホール経営者、精神科医、司法書士、相談員、当事者とさまざまな立場の参加者によってディスカッションが行われた

障がいのある方とそうでない方は分けて対応すべきだということなどが議論された。

その後のディスカッションでもさまざまな質問が取り交わされた。「ホール内で問題を持った人たちの姿ってどんなタイプ?」「問題ある人へのホールの対応は?」「普通の人へのめりこむ状況って?」「医療でできること、できないことは?」など、質問内容も多岐にわたった。これらの回答を含めた報告書が完成した。希望者には無償で配布している。

シンポジウムに先立ち、東海大学健康科学部准教授でワンダーポート副理事長の宮永耕氏の講演が行われた。ワンダーポートは日々見直され、社会環境や知識の蓄積によって、見直しが図られてきたこと。その意義とあわせて限界もはっきりとしてきたことなどが語られた。そして、「ぱちんこのサービスを提供する人たちにもこのワンダーポートという活動について、もっともっと知っていただくことが必要」として話を締めくくった。

当日出席したさまざまな立場の関係者からは、このフォーラムや活動への期待が寄せられた。リハビリサポート・ネットワークでは今後もこうした自主的なイベントを開催していく予定である。